
メンタライジングによる 青年への支援

MBT-Aの実践ガイド

トゥルーディ・ロソー,
マリア・ウィーヴェ,
イオアナ・ヴルーヴァ編
西村 馨監訳,
揖斐衣海, 大橋良枝,
木村能成, 渡部京太訳

北大路書房, A5判256頁, 4,180円, 2024年3月刊

(たかつきクリニック) 東 啓悟

本書は思春期・青年期の若者に対するMBT (Mentalization-Based Treatment) の実践ガイドである。MBTが日本に導入されて以来、それを若者に対して応用しようという試みは数多くなされてきたように思う。その際にこれまで参照されてきたのは、成人に対するMBTであったり、MBT-C (児童に対するMBT) が導入されてからの数年間はMBT-Cであったりしたため、若者との臨床実践に取り組む臨床家にとっては待望されていたものではないだろうか。

本書を読み終えて評者が最初に感じた感想は、「まるでジェットコースターのようにであった」というものであった。読み進めていく内に、評者には実にさまざまな思考、情緒、想起が体験されたのである。訳者の一人である揖斐氏による「訳者まえがき」では、揖斐氏の情緒あふれる、そして切実な言葉に胸を打たれた。しかし続くFonagyによる「まえがき」

は、進化論や文化論をも踏まえた考察で、非常に難解に映る。評者は「時代の先を行き過ぎているのではないか」とすら感じ、理解するのにかなりの時間と思考を要した。

イントロダクションを経て理論編である第Ⅰ部へ入っても、ややそうした「難解である」という印象は続く。特に青年期の脳の成長とメンタライジングとの関連について解説した第2章は、神経生物学的な知見が多数登場し、若者を理解するために不可欠な知識であるとはいえ、頭を悩ませながら読み進めていった。

しかし、「考える」ということがメインかのように思われたそれまでから、実践編である第Ⅱ部に入ると、その様相は一変する。本書の特徴でもあるが、豊富で非常に具体的な事例を提示しながらMBT-Aの実践とはどのようなものかが提示されているこれらのセクションでは、その技法やスタンスの内容もさることながら、経験豊富な実践家でもある各章の著者の真摯で人間的な姿を目の当たりにすることになる。臨床家である以前に、一人の人間として、決して目を逸らすことなく、若者と真正面から向き合っているその事例記述には非常に心動かされることだろう。そうした人間性と技法とが一体化しているように見えるところには、感動すら覚える。個人的には、そうした実践のスタンスを支えるものとしてのスーパーヴィジョンに触れている第6章は、その性質が既存の心理療法のものとは根本的に異なることが読み取れることも含めて、極めて重要な章だと思う。

応用編でもある第Ⅲ部でも、こうした心動かされる事例と、それをベースにしたMBT-Aの技法・スタンス・試みには、情緒と思考がフル回転である。良い意味で疲れる読書体験ですらあったかもしれない。特に第Ⅲ部では、素行症や多様なジェンダーを抱える若者に対するMBT-Aの応用・適用において未だ発展中の試みについても記述されているため、「自分ならどうするだろうか」ということにまで思いは巡る。そして、メンタライジングな臨床家として組織や連携の中でどのように働くかのモデル、考え方でもあるAMBITについて記した第12章は、そのようなことに関しての教育を受けることはほとんどなかっただろう日本の臨床家にとっては、革新的な内容だろう。その性質上書き方が難しいのだろうが、こうしたAMBITの事例が記述されていなかった点だけが惜しいと感じられたが、それもま

たAMBITをより深く学ぼうとする意欲を掻き立ててくれる。

この「ジェットコースターのような」という評者の感想は、それこそ若者が日々体験している感覚であるのかもしれない、本書はそれを追体験させてくれているのかとも感じられる。難しさや苦難に満ち溢れた若者との触れ合いに日々苦勞しながら取り組む臨床家にとって、本書は灯台のように指針を示してくれるのではないか。しかし重要なことは、それはあくまで指針であり、実際にどのような道を進むかは、臨床家・読者が自分で決めなくてはならない、ということだろう。一人の人間として若者たちと真摯に向き合っている、本書の著者・訳者らのように。

原書：Trudie Rossouw, Maria Wiwe, Ioanna Vrouva (Eds) : Mentalization-Based Treatment for Adolescents : A practical treatment guide
